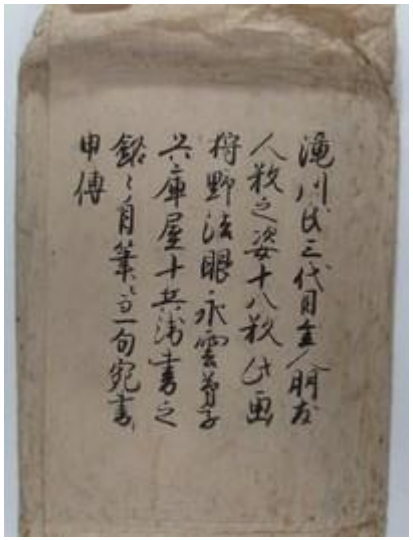
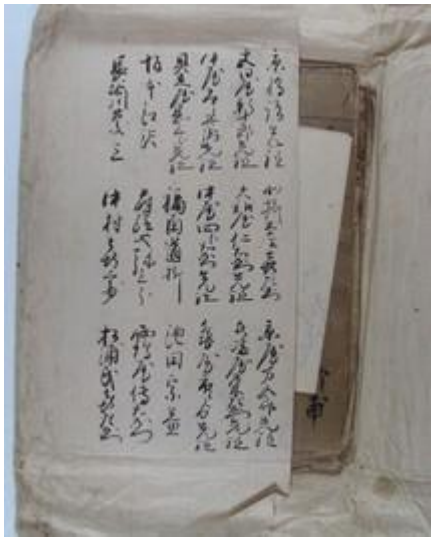
第 69 回　江戸中期、商人のお友達-人物画と俳句

第 51 回コラムでは、松江藩の御用商人新屋（瀧川家）について、御用宿としての役割や文化的教養の高さについて紹介しました。今回は同じ瀧川家文書の中から絵画作品を紹介したいと思います。

色紙に描かれた 18 人の肖像画で、それぞれその人物自筆の俳句が詠まれています。後世の人が記した包紙には「狩野永雲弟子の兵庫屋十兵衛が描いた、瀧川家三代目の朋友の姿。それぞれ自筆にて一句ずつ書いたという。もともと金小屏風に仕立ててあった」との伝聞を記しています。





三代目瀧川伝右衛門（隠居後は常栄と号す）は、延宝 4 年（1676）まで 30 年余り大年寄役を勤め、元禄 16 年（1703）に亡くなったので、その頃に描かれたものという事になります。狩野永雲は松江藩の御用絵師で、二代藩主綱隆の絵の師匠でもありました。

包紙にあるように、その弟子の兵庫屋十兵衛という人物が描いた作品のようで、18 枚の中には自身を描いた肖像画も含まれています。町人も御用絵師の門人になる事ができたのですね。

さておき、瀧川家は代々茶や能に関して藩主家と交流を持ち、日頃から稽古を積んでいたことは前回のコラムで紹介しましたが、俳諧や和歌についても代々嗜まれてきたのではないかと推測されます。幕末から明治初期の代には歌道師範である有栖川宮へ入門もしていました（信楽寺所蔵瀧川家文書）。

朋友 18 名の中には、瀧川家（当時は鶴屋）の分家か出店と見られる名や、大年寄・大目代を勤めるような家柄の町人や医者などが見えます。服装は町人は裃、医師のような人物は着流し、あるいは上下分かれた着物（下はズボンのようなもの）に十徳を羽織り、みな帯刀をしています。

時代を経て擦れている部分もありますが、もとは屏風に仕立てられていたとあって絵画的にも美しく、上流町人たちの文化交流の様子を視覚的に示す貴重な史料だと思います。

その中からいくつか、肖像画と俳句を紹介したいと思います。（裏の貼紙は後世の瀧川家の覚書）

- 鶴屋伝右衛門（可吟）「岩のかたにかゝる衣は海雲哉」

（裏貼紙）「瀧川氏鶴屋三代目幼名千代治、後に伝右衛門と号す。隠居して常栄雅名を可吟、七十七歳去る」

- 兵庫屋十兵衛（重次）「味へは砂糖そ歌の花の露」18 枚の絵の作者。

（裏貼紙）「宮田屋新十郎先祖絵を能くす」（宮田屋新十郎の名は天明頃の大目代に見える。）
子孫である宮田新十郎も絵をよく描いたとあります。

- 鶴屋喜左衛門（慮計）「かまはぬやこころの花に春の風」

（裏貼紙）「北堀へ出店なられ候喜左衛門事哉」

- 長谷川慶三（友慶）「岩も物をいふ通涼しや松の声」

（松江市史料編纂課／和田美幸／2017 年 10 月 16 日記）